

研究ノート：生と死を考える

デス・エデュケーションをめぐって

—アメリカと日本—

竹内 啓二

目次

はじめに

I. アメリカにおけるデス・エデュケーション

1. アイリーン・ノップの論説
2. ジョン・モーガンの解説
3. リン・アン・デスベルガーとアルバート・
リー・ストゥリックランドの著作から

II. 日本におけるデス・エデュケーション

1. アルフォンス・デーケン「死への準備教育」
2. デス・エデュケーションに対する様々な観
点

キーワード：デス・エデュケーション、生と死の教育、死への準備教育、いのちの教育、死生学、生と死を考える会、生命倫理教育

はじめに

2005年12月2日～4日、モラロジー研究所、生と死を考える会全国協議会、千葉県東葛地区・生と死を考える会の共同主催で、「生と死を考える会2005全国大会」が本研究所で開催された。そのテーマは「すべての教育の基礎に“いのちの教育”を」である。米国から大学生向けのデス・エデュケーションのテキストを執筆したリン・アン・

デスペルダールを招き、道徳科学研究センターが運営して特別研究会も開催された。本稿では、米国におけるデス・エデュケーションはどのようなものかを、いくつかの論文、文献によって紹介し、このデスペルダールの講演にも触れながら、概説する。日本でのデス・エデュケーションをめぐる議論についても紹介する。

I. アメリカにおけるデス・エデュケーション

まず、英語で書かれている論文や事典などで、主としてアメリカにおけるデス・エデュケーションについてどのように説明されているかを見ていきたい。最近のものから、さかのぼっていく。最初にアイリーン・ノッパの論説から見てみよう。

1. アイリーン・ノッパの論説（「デス・エデュケーションとカウンセリング協会」の機関誌より）

1) デス・エデュケーションとは何か

(1) デス・エデュケーションの意味と目的

ノッパは、まず、カリッシュ (Kalish 1989) の見方を紹介して次のように述べている。

デス・エデュケーションは、死と死にゆくことの意味、悲嘆と死別に関連する事柄の理解を含む諸課題にかかわる計画的な教育を意味する。デス・エデュケーションの目標には次のようなものがある。死についての言説を進展させること、死にゆくことと生きることを統合すること、死の理解と悲嘆の過程を説明すること、死と死にゆくことと悲嘆についての文化的多様性に対する感受性を高めること、悲嘆の経験の普遍的、個別的経過を正しく理

解することなどである²⁾。

死別体験をした人の悲嘆をどのように理解し、それにどう対処していくかということは、デス・エデュケーションの重要な部分を占めているといえよう。

(2) デス・エデュケーションの成立する形

次にノッパは、デス・エデュケーションがどのような機関で、どのような形で行われているか、また、行われうるかを簡単に説明している。ノッパは、「教育の適切な機会」という形で、インフォーマルなデス・エデュケーションの機会はたくさんあると指摘している。これは、クラスの生徒が家族の死に直面したり、学校で飼っている動物が亡くなったり、自然災害で地域が被害を受けたりといった状況において、生徒のいのちや死への理解を深め、また、その心のケアに当たるということなどが例として考えられる。

ノッパはアメリカのデス・エデュケーションの状況について次のように述べている。

デス・エデュケーションの授業は、ハイスクール（第7-12学年）や小学校でも、そのカリキュラムの中の限られた数に留まっている。きちんとした形のデス・エデュケーションは、大学の課程、研修会、現職中のトレーニング・セッションにおいて行われている。特に、看護・医療の教育において、死と死にゆくことに関する教材はカリキュラムの中に組み込まれている。そのような授業は、少しの数しかなかった1970年代からすると、現在では急増して、ほとんどの大学において行われるようになった³⁾。

2) Illene C. Noppe の論説「デス・エデュケーションと教える学—メタ教育的経験」
“Death Education and the Scholarship of Teaching: A Meta-Educational Experience” (*The Forum*, Association of Death Education and Counseling, Volume 30, Issue 1, January/February/March 2004, pp. 1-4) より。

3) ノッパ、同上

1) デスペルダールの講演は筆者が通訳をし、その翻訳は、本年10月に河出書房新社から出版される「おとなのいのちの教育」に収録される。

小学校から高校までの教育においては、デス・エデュケーションはまだ、限られた形でしか行われていないが、大学においては、カリキュラムの中にきちんと位置づけられて行われているということがわかる。

2) デス・エデュケーションの内容—認知的なものと経験的なもの

次に、ノップは、デス・エデュケーションの内容に2つの種類があることを指摘している。デスベルダーもその他の研究者も表現はいくらか異なっても同様のことを指摘している。

それは、デス・エデュケーションの課程は、知識と情報を強調する認知的なものと学習者が死についての自身の個人的経験や感情に関連づけることを奨励する経験的なものがあり、その両方か、またはそのどちらかに傾く傾向があるということである。

ノップは、アメリカの大学のウェブ・サイトに掲載されている21の課程のシラバスの内容を分析した結果に触れている。それによると、ほとんどの課程は、心理学、社会学、健康科学、宗教学、ヒューマン・サービスの学部開設されていた。最も一般的なトピックは（多い順に）、医療倫理、葬儀、死にゆく過程、比較文化的見方、公的な悲劇的事件と死、ホスピス、スピリチュアルな問題、死別と悲嘆、子供と死であった。ほとんどの課程では、試験と研究レポートによって評価する認知的内容を含んでいた。しかし、また個人的経験についての作文と、葬儀社、墓地、ホスピスの患者、病院の訪問などの体験学習も含まれていた。

筆者は2002年から2003年にかけて、アメリカ、ジョージタウン大学に研究留学した際に、学部学生を対象とする「死と死にゆくこと」というテーマの課程を聴講した。そのクラスは、社会学の専門の教師が担当していた。認知的な内容が中心であったが、死別と悲嘆の問題も取り上げ、教師自身の兵士としての戦争体験なども話され、知識を伝

えるだけに終わってはいなかった。また、主として医学生を対象とする、さまざまな宗教の死生観とスピリチュアル・ケアについての、それぞれの宗教の専門家・宗教者による一連の講演会も聴講した。様々な宗教の背景をもつ患者をケアすることになる医師・看護師がこのような教育を受けることで、疾患のある臓器だけでなく、患者個人を独自の人間として人間全体を見る視点が開けてくることであろう。

3) デス・エデュケーションの成果

ノップは、デス・エデュケーションの効果に関する研究を取り上げている。デス・エデュケーションによって、教育を受けた者に、感情的、態度的、行動的、認知的変化が見られたことを、ダーラクとライゼンベルク (Durlak と Reisenberg 1991) によって次のように説明している。デス・エデュケーションの課程をとった学生は、死と死にゆくことについての一般的なことがらに関してより優れた認知的理解を示した。また、行動上の変化、すなわち、死にゆくことについて話すことができるようになり、ライフスタイルが大きく変わるといった変化も示した。恐怖感の減少や死と死にゆくことについての不安が少なくなるなどを含む感情的次元における変化は、経験的な授業の場合には見られたが、教訓的な授業の場合には見られなかった。しかし、両方の教授法を含んだ大学の授業の場合は、死への不安の減少が見られた。それゆえ、死と死にゆくことに関する知的、行動的、感情的変化は、受ける教育のタイプによって影響を受けるとノップは述べている。恐怖や不安の軽減といった感情的な面での変化には、体験学習や、個人的な経験に結びつける教育が有効であることがわかる。

4) デス・エデュケーションの最近の傾向

また、ノップはデス・エデュケーションの最近の傾向について述べている。

(1) インターネットの活用と大規模な惨事の影響

ノップによると、過去10年間に於いて、デス・エデュケーションは変わった。インターネットの活用は、デス・エデュケーションを拡大した。多くの死に関するウェブ・サイトに、誰でもアクセスできる。デス・エデュケーションのコースもオン・ラインで、より広範で多様な人々に提供されるようになった。

また、コロンバイン高校での乱射事件、9・11の事件、イラク戦争などの出来事によって、米国人は死を強く意識するようになった。死の教育の教育者は、大きな惨事への応答に関する研究と情報の普及において中心的な役割を果たしている。大規模な惨事における共有されたトラウマ、広範囲に及ぶマス・メディアがもたらす、人々への二次的な影響、そしてこれらの経験の長期的な影響は、どのように死について話すかということについてメンタル・ヘルスの専門家、親、教師たちを教育する教材の需要を高めた。また、そのような教材は、さらなる支援が必要な人々と、心的外傷を受けた人々に対する最も効果的な介入の仕方を確定するための情報を提供した。

この点に関して、テスペルダールが講演の中で、米国における殺人事件の被害者の支援組織について触れていたことが思い出される。すなわち、「殺害された子供の親の会」(Parents of Murdered Children)という組織である。この組織は殺害された人のすべての親族のためのもので、殺人による死に伴う問題に関する知識に基づいて支援を提供している。この組織の会員は特別なデス・エデュケーションを受ける。裁判があれば、この組織の誰かが裁判に出る家族に付き添う。もし家族が裁判で証言することができないならば、誰かが代理で出て、情報を提供する。この組織は「MADD (飲酒運転に反対する母親たちの会)」と同様の働きをして、アメリカでは弁護と支援の団体としてよく知られているとのことである。日本には、「全国犯罪被害者の会」があり、犯罪被害者の支援と救済のための活動をしている。「MADD Japan」も、日本に3年前に設立され、飲酒運転の被害者とその家族の支援、飲酒運転反対運動を展開している。

近年、日本においても、悲惨な事件や事故、自然災害が頻発している。また、自殺者も年間3万人を超えている。デス・エデュケーションの必要性は高まっている。

(2) デス・エデュケーションの専門家の需要の増大と免許・資格の取得

ノップによると、訓練を受けたデス・エデュケーションの教育者の増大する需要は、専門化を推し進め、教育の機会を拡大させた。「デス・エデュケーションとカウンセリング協会」は、死生学の免許取得のしくみを再検討した⁴⁾。多くの大学では、大学院レベルで学位と資格取得プログラムを提供している。さらに、ソロス財団の「アメリカにおける死に関するプロジェクト」のようなイニシアチブと「アメリカ心理学協会」のような組織は、メンタル・ヘルスの専門家には終末期のケアのためのより一層のトレーニングが必須であると認めている。

日本においては、ノップが言及している「デス・エデュケーションとカウンセリング協会」のような組織も、同協会の認定する免許・資格に相当するものもなく、有志の教員がさまざまなデス・エデュケーションの試みをしている段階である。

(3) 医療専門家にとってのデス・エデュケーションの機会が拡大

ノップは、もう一つの最近の傾向として、医療専門家にとってのデス・エデュケーションの機会が拡大していることを指摘している。人生の終末期における医師・看護師と患者の断絶に光を当てた主要な研究、自殺補助の法制化への努力、継続する医療技術の発達、ヘルス・ケアの管理の変化によって拍車をかけられて、デス・エデュケーションは医学部のカリキュラムの中により一層取り入れられるようになったという。ノップは、ディッキンソン (Dickinson 2002) の研究を引きながら、1975年から2002年の医学部のカリキュラムを調査して、緩

4) Association for Death Education and Counseling のホームページに「死生学免許状」(Certification in Thanatology) とその上の免許である Fellow in Thanatology の取得の方法が掲載されている。「死生学免許状」は、学士の学位をもち、60時間以上の死生学の教育経験を必要とし、3年ごとに更新しなければならない。

和ケアと倫理的問題を含む終末期の問題に関する教育の機会が増大していることを指摘する。ただそれでも、この調査に答えた医科大学の18パーセントが死と死にゆくことに関する本格的課程を提供していたにすぎなかったことも述べている。アメリカの医科大学においてもまだデス・エデュケーションは十分に行われていないということがうかがえる。

(4) 刷新的な教育方法の探究

ノップは、デス・エデュケーションの教育者が、刷新的な教育方法を探究し続けていることを指摘している。例えば、『死の研究』誌 (*Death Studies*) の最近の論文において、ボシュとホイザー (Basu と Heuser 2003) は、地域への奉仕を大学の授業に取り入れること (「サービス・ラーニング」) によって、その授業に出席した学生たちが終末期の問題についてより深いレベルの考えと理解に至るかを述べている。医学教育において、「ナラティブ・メディスン」と呼ぶプログラムで、コロンビア大学は医学生に普通の言葉で病人のケアの経験について熟考して書くことを教えている。演劇も、デス・エデュケーションの効果的道具として創造的に用いられてきた。例えば、マーガレット・エドソン (Margaret Edson) 作のピューリッツァー賞受賞の劇、『ウイット』 (*Wit*) は、海外でも医学生の効果的な教育のツールとなっている。

前述したように、デス・エデュケーションにおいては、感情的、経験的なアプローチが重要な役割を果たす。デスペルガーも講演の中で、デス・エデュケーションのテキストである『最後のダンス』の作成にあたって、感情的な面での教育を考慮したことを次のように述べている。

私たちの教科書を作成するにあたって、学生に感情面での教育を提供するために、ある感情を引き起こすような視覚的な資料を取り入れる必要があると決めました。写真、漫画、囲み記事、一覽

表、図は、初版本から不可欠でした。イラストは白黒のものにしました。その方が写真のエッセンスを表すと考えたからです。こうしたことが学生に、死と死にゆくことと死別についての多様な側面に関する自分の気持ちや考え方を明確に理解させることになると私たちは考えました。

実際、デスペルガーの『最後のダンス』には、学生用のワークブック *A Journey Through the Last Dance: Activities and Resources* が出版されていて、『最後のダンス』の各章に沿って、さまざまなワーク、内容把握問題、課題を発展させるための設問などが提供されている。デスペルガーは、講演において、このワークブックから選んだ死にかかわる自分の考えを理解するための質問事項を聴衆にやってもらった。パワーポイントを使いながら、各質問に関連する写真などの映像を見せ、イメージを膨らませる工夫がなされていた。なお、『最後のダンス』には教師用の学生へのテストと課題のCD-ROMもある。このようにデス・エデュケーションの教育方法がさまざまに開発されていることがわかる。

(5) 民族的な多様性と異文化の理解

最後に、ノップは、民族的な多様性と異文化の理解という課題を論じている。長く死と死にゆくことに関する教科書の主要な構成要素であった、態度と慣習における民族的な多様性と異文化の理解は、米国がより世界と結びつき、多様性を有するようになって緊急性をもつようになったとして次のように述べている。

心理学者、精神療法家、教師、葬儀屋は、死と死にゆくことに関する異なった文化、宗教における見方や慣習について、しばしば研修を受ける。研修を受けないと、コミュニケーションの誤り、誤解のリスクは大きい。幼稚園から医学校にいたるまで、死に関して正しい唯一のやり方はないということを教えることは、全般

的な文化的違いについての理解を促進し、自分たちの独自のやり方は正当なものであるという理解につながるであろう⁵⁾。

多様な民族、多様な文化の人が共存するアメリカであるから、デス・エデュケーションにおいても、特に民族的な多様性と異文化の理解が重視されているのであろう。デスベルダーの『最後のダンス』の中でも、死についての比較文化的見方について一つの章を充てているだけでなく、本全体にわたって比較文化的な視点がゆきわたっている。また、『最後のダンス』の中で、デス・エデュケーションの教育課程の教材に関して次のように述べていることは注目に値する。

民族集団や他のマイノリティー集団は、デス・エデュケーションの教育課程で用いられる教材の中で十分に表現されていない。このような状況はこの10年間のうちにやや改善されたけれども、教えられていることの多くはまだ主に中流階級の白人の研究に基づいたものである。このような状況に回答して、ダレル・クレイス (Darrell Crase) は、「黒人も死ぬのではないですか?」と問うている⁶⁾。

現代の多文化多元主義的社会環境の中で、このような問いは多くの多様な背景をもった人々にあてはまるものとして理解されなければならない。実際、この10年間における最も洞察力のある発見と理論のいくつかは、死にゆくことと死と死別についての広い比較文化的な観点からなされている⁷⁾。

デスベルダーの講演の中心的なメッセージが、「固定観念で、他の

5) ノップ、同上

6) Darrell Crase, "Black People Do Die, Don't They?" *Death Studies* 11, no. 3 (1987): 221-228.

7) Lynne Ann DeSpelder and Albert Lee Strickland, *The Last Dance: Encountering Death and Dying*, 7th Edition, McGraw-Hill Higher Education, 2005, p. 536.

人を見ないようにしよう」というものであったこともこれとの関連で指摘しておきたい。講演における前記の質問事項に答える演習の後で、彼女は次のように述べた。

自分の気持ちについてのこの短い振り返りは、個々人は死と死にゆくことと死別に関して、文化的な規範に従う場合も従わない場合もあることを指摘することを意図しています。人の気持ちや考え方を決めてかからずに、強い関心を持ち、耳を傾けることで、様々な問題に関する個々人の気持ちについての考えを刺激することが重要です。

つまり、文化により、死についての見方が異なることを理解しなければならないが、ステレオタイプな見方で、個々人を見ることの間違いを指摘している。それゆえ、すぐその後で、次のように述べている。

本日、私は皆様に固定観念にとらわれずに考えることに挑戦していただきたいと思います。それぞれの相談依頼者、学生、患者を理解するために使う方法についてお話します。それらの人々の経験は自分の経験と同じ場合もあるしそうでない場合もあります。デス・エデュケーションの最も重要なことは、それぞれの人に強い関心をもって接することです。

デスベルダーが指摘しているように、固定観念・先入観にとらわれずに、物事や他の人を見るということは、異なった実践、儀礼、信念体系について理解するためにも役に立つ方法である。自分の先入観を一時棚上げしておいて、個人の気持ちや考え方について質問することを彼女は推奨している。そして、ここでも、よく耳を傾けること、傾聴することが重要であることを強調している。

〈参考文献〉

- Basu, S., & Heuser, L. (2003). Using service learning in death education. *Death Studies*, 27, 901-927.
- Charon, R. (2001). Narrative medicine. A model for empathy, reflection, profession, and trust. *Journal of the American Medical Association*, 286, 1897-1902.
- Dickinson, G. E. (2002). A quarter century of end-of-life issues in U.S. medical schools. *Death Studies*, 26, 635-646.
- Durlak, J. A. & Reisenberg, L. A. (1991). The impact of death education. *Death Studies*, 15, 39-58.
- Edson, M. (1993). *Wit*. New York: Dramatists Play Services Inc.
- Hutchings, P. (2000). Approaching the scholarship of teaching and learning. In P. Hutchings (Ed.), *Opening lines. Approaches to the scholarship of teaching and learning*. (pp. 1-10). Menlo Park, CA: Carnegie Publications.
- Kalish, R. A. (1989). Death education. In R. Kastenbaum & B. Kastenbaum (Eds.), *Encyclopedia of Death* (pp.75-79). Phoenix, AZ: Oryx Press.

2. ジョン・モーガンの解説 (『生命倫理学事典』より)

次にジョン・モーガンによる、『生命倫理学事典』の「デス・エデュケーション」についての説明を取り上げてみたい。

1) デス・エデュケーションの3つの基本的意味

モーガンは、「デス・エデュケーション」という言葉は多くの意味を含んでいるが、3つの基本的意味があるとしている。まず、デス・エデュケーションは「死への準備」という意味をもっている。

『易経』、『チベットの死者の書』、『往生の術』(アルス・モリエンティ)の書、旧約と新約の聖書は、多かれ少なかれ、死と死に関連する問題、例えば不死、葬式儀礼、死別にもなう行動などについて準備することを目的としている。ヒンドゥー教、仏教、イ

スラム教、ユダヤ教、キリスト教などの偉大な宗教は、この世における人間はあの世への過渡期にあると教えているので、すべての宗教の目的は、死への準備であるということもできる⁸⁾。

デス・エデュケーションと宗教の関係は深いということがいえる。終末期の患者にとって、死後の世界や魂の存在をどうとらえるかが問題となるであろう。デスペルダールも、講演の質疑応答の中で、「死を壁と見るか、ドアと見るか」という問題を取り上げた。死を壁と見るとは、死後の生も死後の世界もない、無であるとする見方である。つまり死によって、すべて行き詰まってしまうというものである。それに対して、死をドアと見る見方は、死の先にも続いていくものを見ている。魂であれ、死後の生であれ、何か死を越えて存続していくという見方である。多くの宗教は後者の見方に立つものである。

モーガンによると、デス・エデュケーションの第二の意味は、実際のあるいは可能性としての死によって影響を受ける諸決定についての教育というものである。つまり、死にかかわる職業に従事する人たちのためのデス・エデュケーションである。モーガンは次のように述べている。

医療と看護、法律、聖職者の職務、カウンセリング、軍隊、警察、消防、葬儀などは、すべて死を防いだり死をもたらしたりする可能性と死の結果によって影響を受ける。これらの職業への従事者への研修の中に、死の定義についての真剣な議論やこれらの専門家たちによる死にかかわる決定における個人的、道徳的、法的、経済的問題についての議論が含まれないならば不十分である⁹⁾。

8) 以下のモーガンの解説の引用などは John D. Morgan, "Death Education" in *Encyclopedia of Bioethics*, Warren T. Reich, ed., Second Edition, New York, Simon & Schuster Macmillan, 1995) より。

9) モーガン、同上

モーガンは、デス・エデュケーションの第三の意味として、死の意味、死に対する態度、死への対処の仕方に焦点をあてた教育課程や授業をあげる。そのような課程はその目的としてしばしば、次のようなことへの理解を含んでいると述べている。

(a) 死は自然なライフ・サイクルの一部であること、(b) 死にゆく人はまだ完全に生きているし病の終末期における独特の欲求をもっていること、(c) 遺族は正常な反応と欲求をもっていること、(d) 死にゆく人と残される人の欲求は、支援する共同体によって満たされること、そして、(e) 子供たちは死と死別を含むライフ・サイクルの全体について知る権利があること。小学校、中学、高校、大学においてデス・エデュケーションは、異なっているけれども、上記の5つの要素は共通している¹⁰⁾。

デスペルダールの講演や『最後のダンス』も、これらのデス・エデュケーションの5つの要素を含んでいる。

2) デス・エデュケーションの目的

次に、モーガンは、デス・エデュケーションの目的について論じている。

彼は、1977年以降の文献に見られた、デス・エデュケーションの目標を列挙している。それらは次のとおりである。

(1) 死に関する言葉からタブーの側面を取り除く、(2) 死にゆく人と気持ちのよい理解あるかかわりをもてるようにすること、(3) 死に関連する不安を最小化するように子供たちに死に

ついて教育すること、(4) 悲嘆の働きを理解すること、(5) 自殺願望をもつ人を理解しかかわること、(6) 死にゆくことに関する社会的しぐみを理解すること、(7) 自分の文化や異なる文化における死の諸側面にかかわる多様性を認識すること (Leviton 1977)¹¹⁾。

実際、多くの課程では、死の定義、緩和ケアと葬儀の意味と必要性、悲嘆の働き、死についての子供の理解については達成しているといえるとモーガンは指摘している。

〈参考文献〉

- Association for Death Education and Counseling. 1993-1994. "Code of Ethics." In *Directory of Members*. Hartford, Conn.: Author.
- Leviton, Daniel. 1977. "The Scope of Death Education." *Death Studies*, no. 1: 41-56.
- Stillion, Judith M. 1979. "Discovering the Taxonomies: A Structural Framework for Death Education Courses." *Death Education* 3, no. 2: 157-164.

3. リン・アン・デスペルダールとアルバート・リー・ストウリックランドの著作から

最後に、デスペルダールの『最後のダンス』とその解説書に基づきながら、デス・エデュケーションについての二人の考えをまとめてみよう。

1) デス・エデュケーションのもたらすもの

デスペルダールとストウリックランド [以下、DとSとする] は『最後のダンス』の解説書・ワークブックである *A Journey Through the Last Dance* において、デス・エデュケーションの個人に及ぼす効果について次のように述べている。

11) モーガン、同上

10) モーガン、同上

我々の人生における死の影響を理解することで、我々は人生がいかにかげがえのないものであるかに気づき、親しい人との関係をより深い感謝の心で受けとめるようになる。死と死にゆくことに関する探求を通して得られることの一つは、そのような学習が提供する新しい選択肢である。死は物置から取り出されて、様々な観点から吟味される。死の綿密な吟味は、しばしば愛する人の死に対する悲嘆にかかわる罪や非難の感情を解消することに役立つ。新しい慰めとなる見方は、それまで未解決であったつらい経験に光を投げかけるかもしれない¹²⁾。

つまり、デス・エデュケーションによって死をみつめることで、生をより深く理解することができる。また、愛する人の死にかかわる自分の受け取り方にも変化をもたらされる。

『最後のダンス』においても、デス・エデュケーションの個人への実際効果として、次のような例をあげている。死と死にゆくことに関する課程の最後で、ある学生は重病の母親にどう接するかということにおいて、授業がその学生と家族の助けになったと答えた。他の学生たちも、それまで知らなかった有用な情報や支援機関について知ることができたことを評価している¹³⁾。

さらに、デス・エデュケーションを受けた多くの人は、課程を通しての探求が、自分の人生に対して影響をもつものと気づいている。一人の学生は、哲学のクラスのように、考え方や生き方に関係するものであったとしている。別の学生は、人間の精神の回復力へ自分の信念をより強めてくれたとしている。また、多くの人が過去、現在、生きている人、死んだ人を含むすべての人とのつながりの感覚、親密感を

いなくようになっていたことを指摘している¹⁴⁾。学習を通して、死と死にゆくことと死別の意味により一層気づいて、ある人々は、親族や未来の世代に対する自分の個人的な価値観、人生の教訓、信念、祝福や靈感によるアドバイスなどからなる「倫理的遺書」を書いたことである¹⁵⁾。

DとSによると、死と死にゆくことの学びは、情報とデータの獲得という部分も含んでいるが、人間の死との遭遇から生ずる知恵の獲得という面も含んでいる。この知恵は「不確実さと最終的な死という現実の人間の状況から目をそらさない様々な知、統合的アプローチを」¹⁶⁾必然的に含んでいる。死と死にゆくことへの気づきは、生きている瞬間、瞬間の経験に新たな次元をもたらす。それは我々にいのちの非常な不安定さとともに思いやりの大切さを思い出させてくれる。

DとSは、デス・エデュケーションの個人的な効果だけでなく、社会の課題に対する影響についても述べている。例えば、乏しい医療資源の分配、死にゆく親と高齢者のケア、生命維持のための医療技術の使用のような問題に対しては、情報をもった人々、理解力を持ちながら公共政策の形成に参画できる人々を必要とする。それゆえ、死の意味の問題に取り組むことで、我々の政治的意識を変え、公共安全、軍備縮小、環境汚染、暴力犯罪にかかわる問題に対するわれわれの理解のレベルを深めることができると主張する¹⁷⁾。

DとSによると、デス・エデュケーションと死生学は若い学問領域であり、カリキュラムも結果を評価する基準もまだ確定していない。それだけにこの学問で、研究を進める研究者は、重要な貢献をす

14) Sandra L. Bertman, "Bearing the Unbearable: From Loss, the Gain," in *The Path Ahead*, ed. DeSpelder and Strickland, pp. 348-354.

15) See Barry K. Baines, *Ethical Wills: Putting Your Values on Paper* (New York: Perseus, 2002), DeSpelder and Albert Lee Strickland, *The Last Dance*, p. 551.

16) Doris M. Schoenhoff, *The Barefoot Expert: The Interface of Computerized Knowledge Systems and Indigenous Knowledge Systems* (Westport, Conn.: Greenwood, 1993), p. 100, DeSpelder and Albert Lee Strickland, *The Last Dance*, p. 551.

17) DeSpelder and Strickland, *A Journey Through the Last Dance*, p. 247.

12) DeSpelder and Strickland, *A Journey Through the Last Dance: Activities and Resources*, McGraw Hill, 2005, p. 247. (『最後のダンス』の解説書・ワークブック)

13) Lynne Ann DeSpelder and Albert Lee Strickland, *The Last Dance: Encountering Death and Dying*, 7th Edition, McGraw-Hill Higher Education, 2005, p. 550.

るチャンスがある。また、死生学は、科学的事柄と人道的事柄の両方に関わるので、客観性とケアをすることの両方の質が必要である。また、理論家、研究者、実践者の間のコミュニケーションを維持する努力も必要である¹⁸⁾。

2) 死生学と死の自覚運動の貢献

DとSは、死生学とその延長としてのいわゆる死の自覚運動がすでに全体的な福利に対して多くの重要な貢献をしてきたことに関して、死生学の開拓者の一人であるハーマン・ファイフェル (Herman Feifel) の次の文を引用している¹⁹⁾。

この「死の自覚の」運動は、病気の現象学に関する我々の理解を広げ、医療の人間関係と健康管理を人間らしいものにするのを助け、死にゆく人の権利を増大させる主要な力となった。大惨事と喪失に対する人間らしい反応の活力を強化したことは最も重要な価値である。さらに、それはばらばらになった我々の全体性の統合の再構築に貢献した。おそらくもっと重要なことは、それが現代世界で浸食されている我々の共通の人間性に対して敏感にさせてくれたことである。幾分大きな言い方かもしれないが、我々が死をどのように見るか、そして死にゆく人と遺された人をどのように扱うかは、文明の意図と目標についての主要な指標であると私は思う²⁰⁾。

また、DとSは、緩和ケアのメッセージが「思いやりのある奉仕」を推進していることに言及している²¹⁾。

エリザベス・キューブラー＝ロス、シシリー・ソングース、マザ

18) Ibid.

19) *The Last Dance*, p. 540.

20) Feifel, "Psychology and Death," p. 28.

21) *The Last Dance*, p. 540.

ー・テレサによって提唱された緩和ケアのメッセージに関連して、ロバート・フルトン (Robert Fulton) とグレッグ・オウエン (Greg Owen) は、このメッセージは「死にゆく人のケアの当面の目標を超えて、本質的な宗教的でスピリチュアルな価値」についてのメッセージでもあると述べている²²⁾。死の自覚は、それぞれの人のアイデンティティと価値の認識に基づく「思いやりのある奉仕」を推し進めることを、彼らは指摘している。

デス・エデュケーションの本質的な部分である包括的な事柄を、「死、死にゆくこと、死別に関する国際ワークグループ」(International Work Group on Death, Dying, and Bereavement) は、次のように適切にまとめている。

死、死にゆくこと、死別は、人間存在の根本的普遍的な側面である。個人と社会はこれらの実体を理解し正しく評価することによって生を十全に実現することができる。そのような理解と正しい評価に欠けると、不必要な苦悩、尊厳の喪失、疎外、生活の質(QOL)の減少をもたらすであろう。それゆえ、死、死にゆくこと、死別についての教育は、正規のものであれ、インフォーマルなものであれ、すべてのレベルにおける教育の本質的要素である²³⁾。

DとSは、死と死にゆくことについて学んで、終末期のケアの課題を意識するようになった人は、意義深い選択をし、思いやりのあるケアに向かって努力するとともに、他の人と情報を分かち合うことも

22) Robert Fulton and Greg Owen, "Death and Society in Twentieth Century America," *Omega: Journal of Death and Dying* 18, no. 4 (1987-1988): 390.

23) International Work Group on Death, Dying, and Bereavement, "A Statement of Assumptions and Principles Concerning Education About Death, Dying, and Bereavement," in *Statements on Death, Dying, and Bereavement* (London, Ont.: IWG, 1994). *The Last Dance*, p. 540.

できるだろう、と考えている。また、社会の急速な変化によって、ほとんどの人が、伝統的な社会では中心的なことであった儀式や集まりに、少しの時間しかとらないという状況をもたらしたと指摘している。しかし、DとSによると、デス・エデュケーションによって、葬式を、悲嘆の表現と喪失への対処のための手段であると理解した人は、葬式の儀式の本質的な特色を維持し、その治癒的な価値を損なわないような変化を試みるようになるであろう。そして、ここでも、葬式の意味と悲嘆のプロセスについて一定の知識を得ている人は、その洞察を他の人に分かちとともに、個人的に意義深い選択をすることができるだろう。

DとSは、我々は「適切な死」の可能性に心を向けるべきであると主張する。そのような死においては、死にゆく人の社会的感情的欲求は最大限かなえられ、苦悩は最小限に抑えられるであろう。そこには、非人間的で尊厳を無視した行為はあってはならない。適切な死とは、もし選択可能ならば、自分のために選択する死である²⁴⁾。

デス・エデュケーションの領域や課題は様々であることが、デスペルダの講演や著作からもわかる。その中でも、注目したいのは、現代人が直面する様々な死の局面、自殺、病気、事件、事故、災害、死別とそれに伴う悲嘆などを取り上げ、学習者に対して、それらに対する準備や支援のグループや対策、方法などを知らせることである。これらは実際に役立つものであり、生きていく上で必要でもある。人生における様々な困難・苦難に対して備えるとともに、それらに対する自分の考えを深めることが、よりよく生きることにつながるであろう。また、デス・エデュケーションは、そのような苦難に出会い苦しんでいる人、悲しんでいる人に手を差し伸べる気持ちを引き出す。DとSが言う「思いやりの価値に気づく」ということである。これはモラロジーの「慈悲」につながっている。廣池千九郎も、自らの病、

家族や親しい人の死、病人の救済、人生の挫折などを通して、慈悲の心を深めていったと思われる。

II. 日本におけるデス・エデュケーション

1. アルフォンス・デーケン「死への準備教育」

日本において先駆的にデス・エデュケーションを提唱し、推進したのは、アルフォンス・デーケンであることはよく知られている。デーケンは、デス・エデュケーションを「死への準備教育」と表現している。そして、「死への準備教育」が必要な理由について次のように分析している。日本でも、二十世紀の前半くらいまでは、ほとんどの人が自宅で死を迎えていたため、家族の一員の最期を看取るのが、当たり前であり、それは、遺された人への自然な死への準備教育の機会であった。ところが、近年、ほとんどの人は病院で亡くなるようになり、家族も病室から出されて延命治療が行われるといったことで、安らかな人間らしい死がもたらされなくなった。このように、死が隠されたような状況の中で、自分自身の死や家族の死にどのように臨むかといったことへの関心が高まってきた。

医療技術の進歩によって、延命のためのさまざまな処置がなされるようになったことは一面すばらしいことではあるが、その反面、各自は死に備えたり、死をみつめていかに生き、いかに死ぬかを考えたりすることが少なくなっていったということである。ここにデス・エデュケーションが求められる理由の一つがある²⁵⁾。

デーケンの提唱する「死への準備教育」の中で、重要な位置を占めるのが、「悲嘆教育」(グリーフ・エデュケーション)である。NHKのテレビ番組『人間大学』の一講座として放映された『死とどう向き

24) *The Last Dance*, p. 549.

25) アルフォンス・デーケン「死とどう向き合うか」NHK出版、1996年、19-20頁。

合うか』のテキストをもとに書かれた同名の書においても、悲嘆教育に関して二章から五章までの四つの章を割いている。悲嘆教育とは、愛する人の死別に伴う悲嘆と、悲嘆からの回復についての教育である。同書の二章から五章を簡単に紹介してみよう。

二章では「遺される者の悲しみ—悲嘆のプロセス」と題して、人生におけるさまざまな別れ—病気、離郷、転職、失恋、退職、離婚は小さな死であるとして、小さな死の体験を通して、新たな自己を誕生させることも可能であると述べられている。さらに、悲嘆のプロセスについての詳しい記述がなされている。

三章「人生の危機への挑戦—独りぼっちになる前に」では、配偶者の死を取り上げて、「配偶者を喪う時に備える教育」(プレ・ウィドゥウッド・エデュケーション)の必要が説かれている。配偶者の死によって遺された人はどのような状況に置かれるか、どう対処すればよいかが説明されている。

第四章「突然の死のあとに—独特な心の傷痕」では、壮年の人の突然死、災害や事件、自殺、交通事故、過労死などによる突然死で愛する人を亡くした人は、独特な悲嘆のプロセスをたどることが事例をあげながら説明されている。乳幼児突然死症候群(SIDS)による一歳未満の赤ちゃんを喪った家族の会について触れられている。

第五章「無視される悩み—公認されない悲嘆」においては、遺産の処分をめぐる自分の希望をかなえるための正式の遺言書や贈与書類の作成を薦めている。また、社会的に認められていない人間関係にある人たちに対する、悲嘆への社会的支援の欠如について述べられている。例えば、正式な結婚をしていない同棲者、離婚された相手、過去の愛人などは、葬儀にも参加できない。この他、妊娠中絶後の女性の苦悩、疾病や事故の後遺症による障害、幼児虐待・性的暴力被害の後遺症、エイズ、ペットの死による悲嘆といった、さまざまな公認されない喪失体験に伴う悲嘆のプロセスが取り上げられている。

1982年の秋に上智大学で開かれた第一回「生と死を考えるセミナー」

」をきっかけに翌年に発足した「生と死を考える会」でも、死別体験者のわかちあいの場をつくり、その立ち直りを援助することが会の活動の重要な位置を占めている²⁶⁾。

デスペルダールとストリックランドの『最期のダンス』においても、喪失体験の理解について八章において総括的に解説されているし、さまざまな章でも触れられている。八章は「遺された人—喪失体験の理解」と題されている。その記述の一部の要点を紹介する。しばしば区別なく使われる *bereavement*, *grief*, *mourning* という言葉の定義をしている。すなわち、*bereavement* (死別) は、喪失の客観的な出来事を指し、*grief* (悲嘆) は、喪失に対する反応、応答を意味し、*mourning* (哀悼、喪) は、遺された人が喪失体験を自分の人生の中に組み込んでいくプロセスである。

様々な悲嘆のタイプや段階の説明モデルがあるが、それらは悲嘆のプロセスを包括的に理解するための一助になるにすぎないのであって、それらのモデルがすべての悲嘆にあてはまり、すべての人が同じように喪失の悲嘆から回復するわけではない。

死別体験は体験者の人生の様々な側面を変える。家族構成も社会的関係も変わる、法律的・経済的な事柄にも対処しなければならない。こうして遺された人は試練に立たされる。しかし、喪失体験を克服する過程の中で、創造的なエネルギーが生まれてくる。悲劇的な出来事が新しい生き方への道を開くことがある。喪失体験の衝撃は大きなものであったとしても、多くの人は以前よりも強くなり、成熟し、他の危機に対してもよく対処することができるようになる。喪失を自分の人生の中に組み込むことで、悲嘆を人間としての経験の縦糸と横糸と見るようになる²⁷⁾。

26) デーケン、前掲書。

27) *The Last Dance*, pp. 268-307. *A Journey Through the Last Dance*, pp.139-140.

2. デス・エデュケーションに対する様々な観点

水野治太郎は、死の準備教育の実践を通じて、死を知的・客観的に取り上げるよりは、「感情的レベルを重視した態度に立つことによってはじめて、死と共に生きる「真実の自己」に出会うことができるということ」を確認させられたと述べている。また、「死を考え受容することは、自己と他者を深く結びつけてくれる」として、「他者に交わり他者の苦悩に共感し、ケアしケアされながら、人間であることの深い意味を体験してゆく」と述べている。さらに、死の準備教育では、「柔軟に状況に耐えて運命を受容し服従」するような「強さよりも柔らかな生き方を強調し、長い変化に富んだ人生を生き抜く英知を学んでゆくのである」と述べている²⁸⁾。

水野は、生と死の教育は「弱さにふれる教育」であるとする。すなわち「生命が与えられてあるという弱さへの感性を培うことにこそ」その目的があると主張する。また、そのことを次のように展開している。

生命倫理教育、生と死の教育は、人間の弱さにふれる教育であり、社会の前進には直接貢献しない。……いのちの弱さやはかなさ、受動性、有限性、無力感や敗北感を教える教育である。かつて病んで苦悩することに人間として生きる深い意味があることを指摘するような教育があったであろうか²⁹⁾。

確かに、デス・エデュケーションは「弱さに触れる教育」である。取り上げられるテーマも、死と死にゆくことと死別、死別の悲嘆、突然の死、自殺などであり、苦しんでいる人、悲しんでいる人の苦悩や悲嘆から学ぼうとするものである。

28) 水野治太郎 「ケアの人間学」 ゆみる出版、1991年、182-185頁。
29) 水野治太郎 「弱さにふれる教育」 ゆみる出版、1996年、66-67頁。

若林一美も次のように述べている。

死を学ぶとは「死に象徴されるような「負」の側面——悲しみ、弱さといった観点から、人の心や社会を理解することであり、生命のかけがえのなさを認識すること」に他ならない。現代社会のなかで、とかくみおとされがちな視点から、社会のしくみ、人間関係、自分の心といったものを再考してみようという事なのである³⁰⁾。

道徳教育におけるデス・エデュケーションの意義を論じた田井康雄は、デス・エデュケーションを「人間存在の「有限性」に直接関わり、「人間尊重の精神」や「生命に対する畏敬の念」を導く」教育であると主張している³¹⁾。宗教教育と道徳教育の違いの一つは、道徳教育は人間を生る範囲でとらえることであるとする田井は、次のようにデス・エデュケーション捉えている。

デス・エデュケーションは人間の死後の世界の存在を認めるが、死に至るまでの生の範囲における具体的「生き方」を主に問題にするのである。つまり、デス・エデュケーションにおける人間観は道徳教育における人間観と同じように主に「生の範囲」なのである。すべての人間がいずれは死に直面しなければならず、そのような死に至るまでの生のあり方の問題こそ、デス・エデュケーションの対象であるとともに、道徳教育の対象そのものなのである³²⁾。

30) 若林一美 「死を学ぶとは」 竹田純郎・森秀樹・伊坂晋司編 「生と死の現在」 ナカニシヤ出版、2002年所収、105頁。

31) 田井康雄 「道徳教育におけるデス・エデュケーションの意義」『教育学・心理学論叢』 京都女子大学、2号、2002年、8頁。

32) 田井、12頁。

また、自らの問題として生命と死を主体的にとらえることで成立するデス・エデュケーションは、「生命の尊厳」や「生命に対する畏敬の念」を掘り下げて理解するうえで有効であるとする³³⁾。

人格形成という観点から、デス・エデュケーションと宗教教育を比較して論じた西田隆男は、デス・エデュケーションも宗教教育も、「人が人としていかに生き、どのような人間になるのかということ、死を問いかけて、より深く考えて、実践していく教育である」ととらえている。そして、デス・エデュケーションも宗教教育も、教育の究極的な目的である人格の完成を目的としているとして、特に「死の理解」「死の受容」という点で、両者の教育がどのような人格を形成することに有効であるかを論じている。死について学ぶことが、人間のより高い、成熟した人格形成につながるとする。その理由は、死を目前にしたとき、人間は生に対してもっとも真剣になり、人格の変化と成長が引き起こされるからである。この二つの教育によってなされる人格形成の特徴は「宗教的人格」の特色でもあり、成熟した人格の特性でもある。そして、この二つの教育は「スピリチュアルなく全人教育」と呼ぶことができると述べている³⁴⁾。

岩田文昭は、デス・エデュケーションの日本版の一つとしての「いのち教育」の原理と課題を論じている。「いのち教育」を島菌進のいう「新霊性運動」の流れの中に位置づけることができるとして、ホスピス医療においても「いのち教育」においてもスピリチュアリティに対して肯定的な流れが生まれていることを指摘している。しかし、医療と教育の違いとして、ホスピス医療においては、死とどのように向き合い、どう受容するかといったことが中心的テーマとなるのに対して、教育においては、社会で充実した「生」を過ごすということが主たる関心となると主張する。また、教育においては、集団として対応

することが基本であり、自己決定をなす選択の幅も、医療に比べて狭い。さらに、日本の公教育においては、宗教との関わり方が抑制されたものでなければならない。このような理由から、教育におけるスピリチュアリティは、一定の限定された範囲で扱われる必要があると述べている³⁵⁾。

そこで、岩田が提唱するのは、「いのち教育」において「自己の死」ではなく、「他者の死」を主題にすえることである。心の教育に関連して、「心」の問題、個々人の内面に立ち入るべきではないという立場があるが、「他者の死」を問題にするときには、他者との関係が中心になり、自分自身の心の問題は、さしあたり表立った問題とはならないし、「他者と自己との関わりの中の深まりの中で、スピリチュアリティが間接的に問題となる」ために、「心の問題に立ち入るべきではないという立場と矛盾せず、むしろ徹底させていく側面がある」、と論じている³⁶⁾。

また、日本でデス・エデュケーションを実践してきた人たちは、「戸惑い」や「問い」を子どもと共有することが大切と主張する場面が多いが、岩田は、「自身の生き死にという問題を直接に子どもに突き詰めるのではなく、他者への眼差しを養うことのほうが公教育の場に相応しい」とする³⁷⁾。

島菌進によると、日本における従来の「死生学」は、thanatologyの日本語訳、あるいはそれに対応する日本語として論じられてきたが、それは狭い意味の「死生学」であるとして、鍵括弧に入れて表記する。それに対して、東京大学人文社会研究科の21世紀COEプログラム「死生学の構築」(2002-2006年)の研究計画では、広い意味の死生学を考えていて、それに対応する英語としては、death and life studiesの語をあてている³⁸⁾。

33) 田井、14頁。

34) 西田隆男「宗教教育とデス・エデュケーションにみられる人格形成の研究」『宗教研究』日本宗教学会、64(3)、1990年12月、32頁、35頁、46-47頁、48頁。

35) 岩田文昭「いのち教育の原理と課題 序説」『大阪教育大学紀要 第IV部門』第51巻 第1号、38-44頁。

36) 岩田、45頁。

37) 岩田、46-47頁。

アルフォンス・デーケン³⁸⁾の著作にそって、従来の「死生学」の内容を分析し、島菌は、それが「死への準備教育（デス・エデュケーション）」と密接な関わりがあることを指摘している。そして、デーケンの「死生学」について次のように述べている。

デーケンが考える「死生学」は、とりあえず「実践段階」である「死の準備教育」を肉付けするものとして構想されており、ある種の求道的な態度を養おうとするところに力点がある。現場のニーズに応じて展開してきた知的営みを指しており、目指すところは「死に向き合うことで豊かな人生を送るように人々を導く」ことである。その意味では、「死生学」は広い意味での神学的、あるいは求道的な関心を色濃く反映していると言える。

このような「神学的」「求道的」な「死生学」にある種の可能性を認めながらも、その限界として、一定の規範性を濃厚に帯び、また、学として客観的な知の体系としての掘り下げに向かっていないとすると、多様な価値意識をもつ人々が加わる公共的な知の営みへと広がっていきにくいだろう、と述べている。

前掲の田井や西田の論文は、デス・エデュケーションを道徳教育や人格形成のための教育としてとらえているが、それは島菌のいう「神学的」「求道的」な特色という理解の仕方とつながっている。

島菌が提起する死生学はどのような輪郭をもつのだろうか。島菌は、それは「いのち」に向き合う知であるとする。「死の準備教育」は、その具体化が進むにつれ、「生と死の教育」や「いのちの教育」という語が適切と考える人たちが増えてきた。その例として、島菌は、鈴木康明（教育学・心理学）の「生と死から学ぶいのちの教育」

を取り上げている。その教育は、「肯定的な姿勢でいのちに向き合い、いのちのつながりを自覚して生きがいをもって生きていくように教える導くことである。」すなわち、「いのちの大切さ」や「つながり」のなかで生きることについて教えること学ぶことが、「死の準備教育」と匹敵するか、それ以上の重みをもつ課題と考えられていると島菌は指摘する。

前掲の岩田論文で、教育がホスピス医療と異なるところは、社会の中で充実した「生」を過ごすことに主たる関心がある点であると指摘していることと呼応する。

島菌は、「死の準備教育」の面での輪郭の拡大に加え、生命倫理の観点からも「死生学」の輪郭を広げていく必要性を論じている。デーケンの教育プログラムでも、脳死・臓器移植、安楽死・尊厳死などが教材や論題として含まれていたが、「死」が主要な関心事であることは変わらない。狭く「死に向き合う」位置取りをせずに、もっと広く「いのちに向き合う」位置から生死を問い、そこから生命倫理を考察することを考えることも必要であると述べている。

まとめとして、この広い意味での死生学（death and life studies）が強調しようとする新たな力点として以下の3点に要約している。（1）広い意味の死生学は現代の死生の現場に応じようとする実践的な関心をもつと同時に、そうした実践を支える幅広い基礎的知識の拡充を目指す。（2）それはまた、「死に向き合う」とともに広く「いのちに向き合う」ことも主題とし、応用倫理をはじめ、現代の新たなニーズに応じようとする関連学問諸領域との接点を重んじる。（3）それは死生学への需要が生じる背景について反省的に考察し、自らの学問的思想的位置に自覚的であろうとする。

大谷いづみは、生と死の教育、死生学、生命倫理教育に鋭い批判をしている。学校での生死の教育への提言として、①生命倫理教育と死の教育の止場によって、自己、他者を問い、社会を変革していく地平を切り拓くものにしていくこと。②そのために、生命倫理学と死生学

38) 「島菌進・宗教学とその周辺」 <http://free.jinbunshakai.net/shimazono/index.php?itemid=2>より。島菌進 「死生学試論（一）」『死生学研究』2003年春号、東京大学人文社会研究科、2003年3月を掲載したウェブ・ページ。

を親学問とするのではなく、医療社会学、文化人類学、科学技術社会学、社会福祉学やジェンダー論、障害学などの知見を貪欲かつ批判的に取り入れてゆくこと。③生死の教育が、言挙げできない「小さき人々」の、言葉にならない言葉を掬いとしてゆくこと。会員限定仲良しクラブの議論で終わってはならない、と指摘している³⁹⁾。

水野治太郎は、生と死の教育を支える知の構造について論じ、臨床の知、パトスの知、神話の知からの提案を述べている⁴⁰⁾。その中でも特に注目したいのは、身体性を重視する臨床の知という観点から、次のように述べているところである。

人間が一個の身体に限定される生命をもって限られた生を生き、この世界に投げ出された存在であるがゆえに、この世界から自己をとき放って客観的認識に到達できるとした近代科学の誤りを正すと共に、人間にとって豊かな経験とは、普通の安楽な生活の惰性を突き崩すような不幸や災難や生老病死などの苦痛を伴う異常な体験を身体と精神に刻印されたときはじめて、苦しみを通じていっそうの高次の認識に到達するものであるという経験の本質を明らかにしている。つまり受動・受苦的経験はけっして絶望感や無力感を味わうだけに終わらず、むしろそれと正反対に、生をいっそういとおしく思う心情や生きることを鼓舞されることにつながるのである⁴¹⁾。

デス・エデュケーションは、「不幸や災難や生老病死」の体験が「豊かな経験」であることを学ぶものであろう。

〈参考〉

The Last Dance: Encountering Death and Dying (第7版、2005年)の目次の紹介

- 1章 死に対する態度—変化の傾向
- 2章 死についての学び—社会文化的要因の影響
- 3章 死についての見方—比較文化的・歴史的観点
- 4章 保健医療システム—患者、スタッフ、施設
- 5章 死のシステム—政策の問題
- 6章 瀕死の病に向き合って生きる
- 7章 終末期における課題と決断
- 8章 遺された人—喪失体験の理解
- 9章 最後の儀礼—葬儀と遺体の処置
- 10章 子供と若者の生活における死
- 11章 大人の生活における死
- 12章 自殺
- 13章 現代世界における死のリスク
- 14章 死を超えて、死後の世界
- 15章 前方の道—個人的・社会的選択

39) 松原洋子・小泉義之編『生命の臨海—争点としての生命』人文書院、2005年所収の火谷の執筆部分を参照。同書、140頁。

40) 水野治太郎「生と死の教育を支える知の構造を問う」『麗澤大学紀要』第68巻、1999年7月。

41) 同上、31頁。